【研究ノート・資料】

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲
—— 基礎調査の試み（10）——

大　澤　隆　幸

巌のこと

稲垣巌は、父の存在が重荷だったという言葉を発している。彼は最初は工学部に籍を置き、実学に向おうとした。このことは、八雲が日本での教育活動で教え子達に実際的分野に進むことを強く主張していたことを思い出さずにはいられない。大谷正信への手紙はそれを証言している。実際的方面に進んで、日本に貢献することを望んだのであった（参照拙稿：「悪魔のようなやつ」と「強い泳ぎ手」）（へるん44）。

しかし、実験系の学習は、特に工学部での授業は過密で、忍耐・努力が強いられる（小野木43）ため、次第に意欲を失ったのであろう。彼は精神的彷徨の段階で、父を、そして自分を見つめたと筆者は考える。「自分が引き継いだ八雲の原稿・手帳、その他の遺品をいずれ世間に発表する積もり」（「八雲」16.9）だっただけでなく、大学で英文学に向かい、父が所属している英文学を通して父を理解し、また自分も文学の世界に連なりたいという意欲を抱いたのではないか。巌が創作活動に取り組んだ背景を筆者はそのように解する。

1929 **昭和4年**

1月1日（火）。水田恭太郎訳：音吉の達磨さま（「婦女新聞」新年第一回号）。小泉一雄：焼津の思ひ出（「現代」10巻1号）。

初夏。三宅驥一が焼津に遊ぶ。八雲が滞在した「この家から一町ほど行くと海岸になる。海岸の有様は當時と全く變つて、今ではコンクリートで固めた萬里の長城式の防波堤となつて、何の趣もない」（東京日日。9月1日。後出の「小泉八雲の觀た焼津」68より引用）。

8月。羽仁春：小泉八雲について（「開発」第2号。浜松仏教会）

6日（火）。巌の次女、京子が伏見区深草中ノ島十四番地で生まれる。この後まもなく中ノ島町3－1番地に転居。新築で家賃は50円と高かった（小野木69）。

19日（月）。飛行船ツェッペリンが霞ヶ浦に寄航。この頃、一雄と時は、西大久保新居二階から見た（時82）。

31日（土）から9月2日（月）。三宅驥一：焼津と小泉八雲：富士を中心に（大阪朝日新聞）。昭和女子大463では著者名なし同表題副題なしで東京日日新聞とある。
9月。清の長女蘭子が生まれる。
23日（月）。62歳のセツが回想した八雲逝去時が朝日新聞に――「文豪八雲逝って二十五周年――思い出を語る未亡人」小泉セツ――として載る（へるん28.22）。それを元に再現想像する。
　八雲は食後タバコをのむ習慣だった。セツはタバコが嫌いだった。
八雲「あなたは煙がきらいだから」と言って、シガーに火をつけ、庭に下りる。
そのうちに庭に薄闇が迫る。顔色が青い八雲「何だか胸苦しくなった。」
心配したセツに八雲「こうしていれば治るでしょう。人の苦しがっているのを見るのは不愉快なものだから、あなたはあちらへ行って子供と遊んでいなさい。」
セツは無理に座敷に上がらせ、寝床に休ませる。
「横になったかと思うと、もういけませんでした。狭心症という医者の診断でしたが、真に夢のようにあっけなく逝(い)ってしまいました。」
セツのこの話は明治37年9月26日の項と少し違う。時とともに記憶も薄れたのであろう。
26日（木）。松江市役所、島根県教育会、八雲会主催の小泉八雲先生第二十五回忌追悼会。「故先生にその容貌が最も似て居られるといふ令息巖氏」が出席する（高田143）。
10月。清は日暮里谷中の針方。清は心臓の痛みで楽器が持てず、妻の実家に身を寄せた（ワシオ152）。後に日暮里の別の番地に移ったようだ。清の孤独な戦いを支えてきた影の力であるシズは「日暮里小町」とまでいわれたほどの美人（求龍堂。濱川博：小泉清の人と芸術）。
2日（水）。小泉一雄：父八雲のことども（東京日日。後藤「八雲の觀た焼津」74）。
11月1日（金）。曾根正雄：小泉八雲（「鋪道作家」1巻2号。「焼津の大正～昭和初期の文芸熱　田中久雄の周辺」13。
12月1日（日）。後藤肅堂「小泉八雲の觀た焼津」（「史蹟名勝天然紀念物」第四集第十二号）。丸山153ではこの表題記載なしに言及されているが、昭和女子大では記載なし。光心寺について後藤は「此寺さへ最近他に移轉することゝなつて居る。地價暴騰のため坊さん一と儲けする算段らしい」（63）とひどいことを書いている。波除地蔵の「モデルに撰んだ｛鈴木｝善作と云(いう)ふ小供もことし三十五歳健在」（70）。「此地あまりに故人遺愛が乏しい、イヤ全く無いと云つてもよい」（71）。当時の焼津では八雲はこのようなものだったが、それは松江でも変わらなかった。

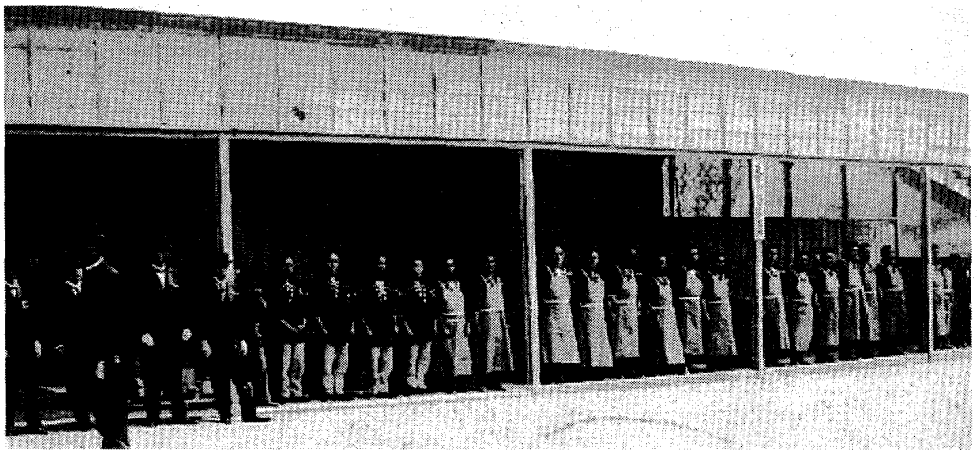
1930 **昭和5年**
この頃、小泉一雄は上野不忍池近くの池之端七軒町の借家に移った（一雄576へるん28.102）。新築の二軒長屋、二階建て。四間。この二階一間で『父「八雲」を憶ふ』

を夜遅くまで執筆した。近所に蕎麦屋が何軒かあって、よく蕎麦を注文した。風呂がなかったので、道路を渡ると銭湯があった。夕方の混み合うときは、時をつれて東京駅地下大浴場「庄司」へタクシーで出かけた（一雄577）。入浴料は三十銭で当時の銭湯の五六倍。一雄の生活には余裕があったようだ。手狭なため半年もしないで、世田谷区の駒沢に移った。「駒沢のゴルフ場近くに新築したばかりの洋館」（時98）、「駒沢緑園（新町一丁目）」（時99）。二百坪ほどの庭があった。押入れの中などの湿気が強くて一雄の蔵書、一雄が幼い頃八雲がわざわざ外国から取り寄せた動物の絵本、衣類に被害が出た（一雄578）。

「私｛時｝が九才（ママ）の頃、世田谷の駒沢緑園から間もなく、桜新町へ移った。丁度、今の"さざえさんの美術館"がある近所であった」（「八雲」15.2）。長谷川町子美術館は世田谷区桜新町１－30－６。

時期不詳。桃山中学に昭和５年に入学、昭和10年卒業で５年間教わった（へるん25.21では三年間とあるのはおそらく不正確）進藤省三の思い出。巌は蛙のほか漢字を書くことが苦手だった。「黒板に漢字を書くときは、つねに角のない象形文字のような円形で、たとえば『日』の字はまず○を書き一を入れるといった調子である」（小野木198）。修学旅行で朝鮮満州へ行った。「二○三高地の戦跡見学で馬車を連ね、黄塵を衝いて突走るうしろの馬車でうれしそうに手を振っておられた姿が生徒の印象に残っている」（へるん25.21 ）。同じ時期卒業の山本耐の思い出「毎週一回クラスで担任とともに会食したときの観察では、巌の箸の使い方は少し変だった」（小野木127）。

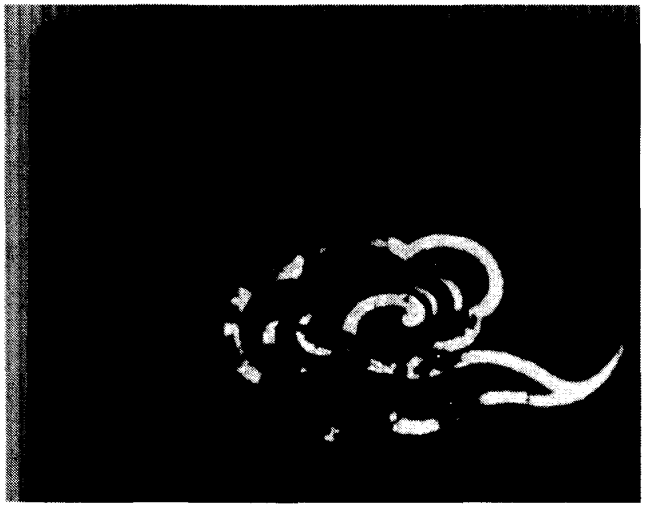
５月30日（金）。９時45分。昭和天皇が焼津到着。10時20分島田へ出発。この35分のうち鰯ヶ島地先南浜に15分滞在。漁場から戻った地元全漁船99隻が整列した様、水揚げ作業、鰹節製造工程を見学される。山口乙吉も二十名の一人として仮設作業所で実演した（焼津水産史上522）。乙吉は「岡骨抜」をした（寅吉112）。四つ割りにした魚を煮熟し、大きな骨をピンセットで取り除き、せいろにのせ燻場で火入れする。せいろにのせたまま細かい骨を取る。これをオカボネと言った（浜通りの民俗132）。



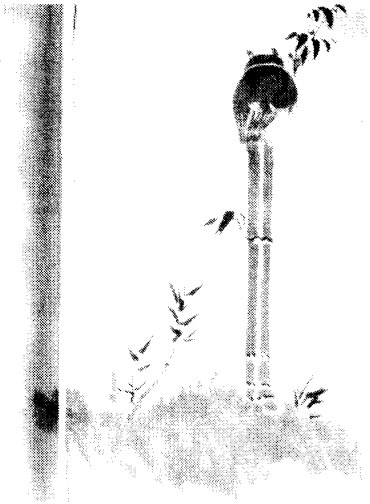
6月4日（水）。フェラーズはドロシーと新婚旅行で大久保の小泉家を訪ねた（カミガミ254）。セツが応対した。そのときの筆跡をアルバム156で見ることができる。一雄がフェラーズに初めて会ったのは昭和12年頃ではないか（カミガミ255）というので、この時に一雄は会わなかったのであろう。
10月1日（水）。学生版小泉八雲全集第五巻発行。これに稲垣巌の翻訳で「俗唄三つ」。学生版「小泉八雲全集」全18冊は第一書房から昭和7年3月まで刊行。八雲のカタカナ手紙を巌が書き直したものが「昭和三年一月に予約出版された学生版全集から加えられた。しかしそれも昭和七年までで終わり、現在刊行されている評伝には収められていない」（銭本健二。日野3）。
12月。清は淀橋の柏木町。神楽坂の日活館に就職（ワシオ153）。

1931 **昭和6年**
月日不詳。二代目山口乙吉がこの年から14年まで監事、17年まで常務理事、32年まで理事に名を連ねている（「焼津信用金庫五十年小史」の役員在任表）。

5月頃。一雄は机に向って「上半身裸で」（時99）何枚も梟の絵を描いていた（一雄579）。それからまもなくの頃。親子三人は銀座で食事をしての帰りの想像。
一雄「タイムもミミズクが欲しいか？」
当時6才くらいの時「欲しい、欲しい。」
早速、四谷から向かって新宿寄りの鳥屋に寄る。そこで手乗りのコノハズクを買い求める。父子共々喜び勇んで帰宅。
翌日。子供のとき以来三十年振りに希望が叶えられた一雄は、丹念にすり餌をつくる。蓑虫を取ってくる。近くの肉屋からレバーを取り寄せる。家中大騒ぎして可愛がる（一雄580）。
　一雄は記録していないが、焼津では彼が子供の頃、乙吉宅から見えた旧家松村家はエンカと呼ばれていて、そこの松にはミミズク（焼津ではゴロッチョと言う）が夜に鳴いていた（寅吉35）。「子供のころから八雲に聞かされた梟（アウル）の話がよほど印象的だった」（一雄579）経緯は、一雄が父から梟の詩を習った明治35年8月の項を参照。
7月15日（水）。この日に一雄の『父「八雲」を憶ふ』が警醒社から出る。この書で、例えば、天野甚助が漂流譚を語っている場面は、ほぼ三十年たっての思い出である。



装丁は一雄の自作自画。「黒地一色に朱の瑞雲を一つ飛ばせ、見返しには竹に梟を墨絵であしらいました」（一雄578）。「ずいうん」とはめでたいしるしの雲。つまり黒い布装で上左に朱の雲。



その裏に後ろ向きの鳥。耳羽で梟と分かる。

梟が大好きだった一雄は、駒沢緑園の家に移ってから、「夏の夜には、うるさくて眠れないほどアオバズクや梟が鳴くのが」（一雄579）嬉しかった。

9月11日（金）。進陽軒の進藤廣吉没。享年54才。墓は貞善院にある。

11月15日（日）。巌は同僚友人の竹淵喜明、山根隼人と甲子園に、読売新聞社が呼んだ米国大リーグ選抜チームの試合を見に行く（小野木176）。14日も行われたが、勤務の都合上この日であろう。大リーグ選抜チームは日本で17勝0敗。この日は11対0で全日本敗北（ホームページ「明治神宮球場のあゆみ」）。野球好きの巌は興奮したはずである。

大正15年6月24日脱稿の巌の作品「大男と小女」に以下の箇所がある。「野球見物などで彼が立ちはだかってゐると後ろの方から『おい、でかいの。ちったあ遠慮しろい。しゃがめしゃがめ』など、怒鳴る奴がある。所が、声のする方へグロテスクな彼の顔が振り向くが最後、誰も彼も『私は何も言やしませんぜ』といふやうな顔付きですまし返ってゐる。さうして二度と再び危険な暴言を吐かうとする者はゐない。」（へるん11.13）。

1932 **昭和7年**

1月下旬（時77）。セツが動脈硬化症のため自宅で倒れる。一雄2.239では脳溢血。「その前から脳梗塞の症状が出ていた」（「八雲」16.12）。一雄夫妻は世田谷桜新町から車で急行。一週間位してから時も昼だけ西大久保の家へ。父方の従兄姉たちもいた。稲垣ミドリと八重子らは10日ほど滞在（「八雲」16.12）。

18日（月）。清は神楽坂の楽屋で三成宛（ワシオ153では昭和6年）に書いた。母が脳溢血で倒れたが、四五日前から少し口が利けるようになり、しかし二度目の発作がくれば危険、と記す。

2月5日（金）。清は母危篤の報で西大久保へ駆けつける。三成宛で母の顔を「仏のような顔」（ワシオ154）と表現。

15日（月）。清は淀橋の家から三成宛で、見舞金への感謝、一雄、清の兄弟間の問題に巌が調停して解決（へるん20.6）、毎日一〜二回は母の見舞いに行く（ワシオ154）。

18日（木）。午前零時18分（「八雲」10.13）午前一時ごろ（時81）セツ没。享年65才。病床に約40日（一雄2.239）。清は母危篤の報で西大久保へ駆けつけた（ワシオ154）。稲垣ミドリは妊娠していて、巌だけが参列。

病床のセツを見舞いに訪れた孫たちの記念写真が「八雲」16にある。年齢順に、後ろに小泉閏10才、右に稲垣八重子9才、左に小泉時7才、中右に小泉蘭子3才、中左に稲垣京子3才。その後小泉時は、2004年9月に焼津で行われた没後百年記念式典でいとこの八重子、京子と72年ぶりに会った。

「セツが一九三二年に亡くなった時に四人の子どもが両親からの遺産を四分割して希望する品をそれぞれに相続しました」（「八雲」16.9）。

20日（土）。この日付で一雄、巌、清が連名で母セツ弔意葉書を西大久保265から出す（へるん文庫所蔵）。

23日（火）。「亡母の初たい夜」に一雄は「亡き母を語る　父八雲の協力者として」を書く（根岸磐井「出雲における小泉八雲」134以下）。

4月。小泉時が「桜新町近くの深沢小学校へ」（時81）入学。

4日（月）頃。清が淀橋から三成宛（ワシオ154）。明日は母の満中陰（四十九日）というのでこの頃か。蘭子がチブスの疑いで寝込んだ、西大久保の家の処分に立ち会えなかった、という文面。

10月12日（水）。稲垣昭男が京都、深草墨染町6－4で生まれる（小野木68）。巌はこの年、ここへ引っ越していた。北向きの家で家賃27円。学校へはいつも徒歩で行った。

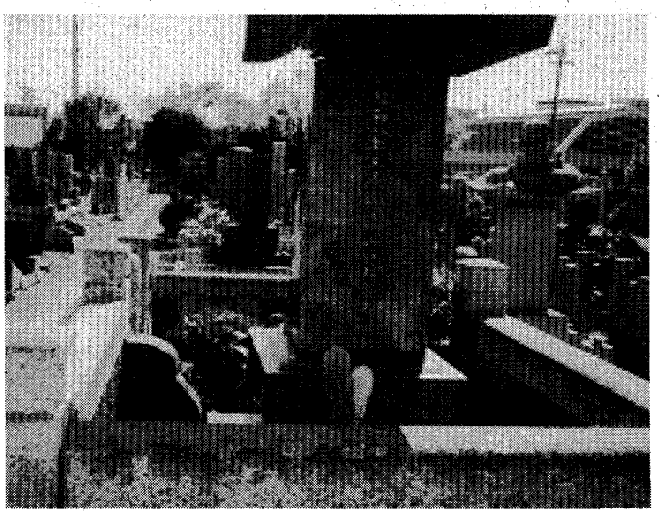
11月。清はかねて希望していた吉祥寺に移る（ワシオ154）。井の頭公園近く6畳3畳の狭い家。

1933 **昭和8年**

「昭和八年松江に八雲記念館が出来たころは、小泉八雲の名も松江の人にはほとんど忘れられて、尋ねる人も少なかった」（市河三喜の言葉。へるん先生生活記５）。

３月。小川の光心寺に今の乙吉の墓を建てる。あの波除地蔵、竜舌蘭の寺で、墓地の大体真中ほどのところにある。周りに囲いがあり、中に石灯籠が立っている。屋根のついた黒御影の石塔で、周囲の墓と比べると堂々としている。表に「山口家先祖代々墓」、碑陰に「昭和八年三月　四代山口乙吉建立」とある。これは八雲が来焼時の梅吉だろうか。二代目乙吉は北山2.40のように梅吉である。

望月雅彦編「皇道産業焼津践団（聞き書き編）」14では、三代目乙吉の妻山口すずの言葉として「昭和十一年三月四代山口乙吉建立」とあり、「四代目山口乙吉が誰を指すのか寺の過去帳を調べても、主人の兄に聞きましても結局解らずじまいとなってしまいました」。おそらくこれは電話でのやり取りのため、「昭和十一年」というのは聞き間違いと思われ、筆者は昭和八年とあるのを現地で確認した。



三代目は、初代の娘てつ（梅吉の姉。これも婿養子をとった）の子が養子になった。二十歳になったころである。

この夏。稲垣巌は「桃中に来られて五年目だったか、夏休みにしばらく隠岐に滞在」（小野木78）。隠岐滞在は学生時代からたびたびあったらしい（同171）。日野雅之（へるん41.86以下。日野）を元にすると

８月18日（金）。10日間億岐有寿家（玉若酢神社宮司）に滞在して夕方、巌は西郷の港を去る。「西郷では鯛釣り」。島前の西ノ島大山（おおやま）へ。「凪がよかった。」大山（現在は西の島町美田字小向）からは石塚和恵が億岐有寿に嫁していた。

巌、四日間の大山滞在。波があってヨサデ｛磯でのさざえや鮑手取り｝ができない。翌日また凪悪し。「大山の水かき」をした。

29日（火）。この日付で巌の億岐家宛礼状。「今度の二週間の旅行」「二週間の大半を過ごさせて戴いた下西｛億岐家のある地区｝」「夏休みもあと二日に迫りました」。

2007年4月16日曇り空に桜が舞い散る億岐家（筆者撮影）

9月。金子健二がこの月から昭和14年7月まで静岡高等学校第四代校長を務める。金子健二は、明治35年9月東京帝国大学一年生のとき、八雲に、二年生以後は夏目漱石に習った。「小泉先生に對する私の追憶は深い。『小泉八雲全集譯』の筆者の中の、その最後の末席に列し得るの光榮を私の高等學校時代の恩師田部隆次先生から與へられた私は、今でも此の全集を目前に飾って先生の精神的恩澤を衷心から感謝してゐる。私は靜岡高等學校長在職中に先生の記念の碑を燒津の、あの先生の執筆記念の家の前に建てようと考へ、これをその頃の靜岡懸知事や土地の有力者に相談した事があつたのも全くこの感謝に外ならなかつた。私はあれ程世界的に讀まれた先生の燒津寓居時代の傑作が内外の讀書人に後世、その記念の天井の低い漁夫の二階と密接不可離の關係に在る事を永久に追憶させ度いと思つた。然るに私は此の念願を達しない中に姫路高等學校長に轉任させられた。私の靜岡愛着の念は先生の燒津の漁夫の二階に在つた。時代は次から次へと推移した。私の念願は年と共に實現の機會を私から奪つた。しかし、後世私の遺志を受けて此の記念の碑を燒津の漁夫の家の前に建てゝ下さる人が在ると信じてゐる。私は世界的文豪の名が燒津の漁夫の家と共に日本を飾る事の出來る機會が一日も速かに來る事を念願してゐる。」（金子 62,63）　明治35年9月参照。

9月28日（木）から30日（土）。小泉一雄：焼津の海と八雲　父逝きて三十年（上）

(中)(下)(日本読売新聞)。
12月26日(火)。稲垣みどりは八重子を連れて父種市良一を京都駅に迎えに行くが、良一は意識を失い、後に亡くなる。良一は巖の義父(種市八重子「祖父良一の思い出」。一松堂)。
時期不詳。時は「中学一年生のとき、剣道部に籍を置いた」(時157)。

1934 **昭和9年**
松村篤四郎:小泉八雲と焼津[其一](静岡県郷土研究第二輯。発行時期不明。静岡県郷土研究協会)。第一が昭和8年11月、第三が昭和9年7月なので大体この時期と推測。
一雄はこの頃から15年にかけて荏原区中延町1056に住んでいた(時150アルバム112)。時は「ちょうど私が小学校三年から中学二年ころまでのあいだ、両親に連れられてはよく銀座に出かけた」(時156)。

1月。巖の癌が見つかる。たまたま京都に来た義弟、種市良春(外科医師)が発見、家で手術したのを長女種市八重子が記憶している(小野木79)
あるとき、巖と同僚である博物担当の教諭三谷道保の会話(小野木81)。巖はなにくわぬ顔で尋ねる。「癌を治療した人の余命は何年くらいですか。」三谷、一般的な質問と思って、「まあ、よくもって三年くらいでしょう。」巖はこれから癌再発の不安の三年間を過ごすことになる。
2月25日(日)。乙吉の妻きせ没。享年70才。
7月以前。巖、家庭内不和。小野木(80)は、巖夫婦をめぐる風説の性質上「信憑性は必ずしも高くないように感じられる」として、敢えて調査をせずあいまいにしている。しかし、へるん35.62でも指摘があり、後出の一雄の説明からしてもやはりこのような件があったと考えられる。
7月31日(火)。「八雲」14.11によればミドリは八重子、昭男を連れて京都を出発。
8月1日(水)。ミドリは東京で一泊、夜行で上野発。関係者の証言からこの日付が正しいようだ。
2日(木)。朝、4時八戸着。ただし小野木(80)では、6月末ミドリは八戸の実家に幼児京子、昭男を連れて帰る。八重子も7月末に、母の元へとある。「二歳だった私{昭男}は生まれた京都を離れて母の実家のある八戸へ移り住み、ここで育てられた」(「八雲」14.6)。
巖はやがて墨染の家を離れて、桂の借家、北白川のアパートで別居生活(小野木80)。「當時次弟巖が妻子ある身にも不拘某氏の令嬢と戀愛に落ちた。母は子のある嫁を離別して新にその戀人との結婚を是認したかつたらしい。私は弟の氣紛れな性格を母以上に識つている。母が私達に相談されるからには八雲宗を今更棄てゝ迄贊成は致しか

ねる。相手の父に當る人も日頃、八雲が晩年抱俥夫を選ぶ時の条件『あなた、おかみさん可愛がりますか？』『ハイ』『それならよろしい』の主義を遵奉して居る人だけに、目の中に入れても痛くない程の娘の願望なのだが應じかねて甚く煩悶されたらしい」「その令嬢は今某博士夫人として幸福な生活を送つて居られる由」（一雄2.235以下）。西野にある付録Hearn's Genealogy（八雲家系図）、によれば、「妻子ある身で恋に落ちる」。巌と土井フミの間のエミ子がいる。年齢から計算してフミとの結びつきはこの年である。巌のこの恋愛は、癌の不安と関係がないだろうか。北山2.208では「養子後離縁」という事実でない記載があり、さらに「桃山中勤務中恋愛結婚エミ子生る」。なおセツの養家の縁者高木令太郎は、富久町時代に巌のことを「女子（おなご）の道」で予言し、驚かせ、爆笑させていた（一雄175）。一雄については「坊さんは珍しい癇強でおいでるが、自己（おのれ）をよう知（ス）っちょいでるけん、まず心配（スンパイ）はない。一生衣食にこまるようなこともなく人の上に立つ相はあるだども、身内（みうち）と目下（めした）の者のために苦労が絶えぬ」と、好意的な予想をしたあと、女関係で「お兄さんの方はなかなか容易（たやす）には欺されなさらんだども、かえって弟御（おとうとご）さんの方が如何（どげ）なもんですやら…」。一雄については後々の事情が反映しているのではないか。

8月。「田舎の淳朴さが好きで、特に隠岐が気に入っていた」巌は、「いつもの隠岐滞在を早めに切り上げた。体調が思わしくなかったからである。一週間ばかり海水浴をしている間に、少し変に感じられ出した、どうやら海で冷えたのが原因らしいと話している。癌が発生していた」（へるん25.21）。

9月。巌、大学病院で手術（へるん同上）。

21日（金）。室戸台風。巌の勤務する桃山中学が被害を受ける。台風時（？）に一時間目の授業をしていた巌は「死線上に立つ」を記す（小野木121）。これは桃山中金城会機関誌「桃山」に掲載。

26日（水）。小山書店から『小泉八雲秘稿画本　妖魔詩話』が出る。一雄はこの頃「洗足池の近所に住んで」（小山21）いた。小山書店のマークはギリシャ貨幣の梟で、一雄を喜ばせた（一雄579）。小泉夫妻は「二人とも、日本的な伝統の美に心酔して居り、調度、道具、その他あらゆる趣味にしても普通の日本人はとてもかなわぬ様な優雅な生活をしておられた」（小山21）。

11月15日（木）。稲垣巌が京都放送局（第二放送）のラジオ番組に出演。題は「父八雲を語る」。放送時間を若干越えたため、話は途中で切られた。巌はそれを非常に残念がっていたという（小野木80）。

この年、清はセツの遺産を元に、西武新宿線鷺宮駅前（中野区鷺宮三丁目1197番地）にビリヤード店を開く。左指と腕にリューマチがおきてヴァイオリンを弾けなかった（ワシオ20、25）。翌年家の裏に画室を増築し、再び画家と仲間と交流、創作に励む。時期不詳。清は蘭子の手を引いて浅草に遊びに行った。公園のメリーゴーランドが彼女の気に入り何度も乗り大変ご機嫌であった。しかし清の財布には帰りの電車賃しか

なかった。「遊びに興ずる娘にせがまれ、弱りはてた彼は、つい近くの質屋にかけこみ、着ていたトンビ｛袖なしコートにケープがついたもの｝を質に入れて、娘の遊戯代にかえたという」（画集）。清が閏を神戸に連れて行った昭和16年秋も参照。
蘭子については「元台東区竜泉寺町に住す　竜泉寺住職高神師少年の頃よく見かけたという」（北山2.208）が、時期がはっきりしない。

1935 **昭和10年**
月日不詳。北新田の光心寺が、荒波の浸食のため現在地に移る。1933年の項にすでに光心寺が小川あるように記したが、おそらく移転は墓地共々一気にではなくゆっくり時間をかけて行われたのであろう。元寺で使用された木材は解体され、本堂に使われた（2007年の現在は庫裏となっているので見ることができる）。光心寺の写真は1902明治35年８月参照。
月日不詳。この年、一雄の『FATHER AND I』がホートン・ミフリン社から出る。訳者は「年配の女性記者」。また「桜子さんというアメリカ育ちの女性」が紹介され、この人は時にしばらく英語の手ほどきをした。一雄の話「私自身、父親から厳しい英語教育をさせられ、つくづく親子関係での勉強は成功しないと思いました」（ヘルン28.104）。しかし、成功したという評価もあるし（参照へるん43.6）、卒業論文で高得点を取っていることは、父の教育のおかげでもあろう。
「ちょうど昭和十年ころは」（時127）一雄はこの頃世田谷の桜新町にいて、合気道に凝っていた。時「私が九才の頃、世田谷の駒沢緑園から間もなく、桜新町に移った」（「八雲」15.2）

１月22日（火）。午後11時頃、鰯ヶ島酒友小路西側裏の米穀商工場付近から出火（原因不明）。付近は人口稠密でその上道路狭隘のため消火は進まず、住家全焼31戸・半焼戸・非住家全焼19棟。
24日（木）。この日付の土井晩翠の葉書では一雄は東京市荏原区中延町1056。この頃時が中延の小泉家の庭を描いた水彩画が、『八雲の五十四年』205にある。この年頃、八雲の印税は細々ながらもまだ続いていた。一雄は親子三人、お手伝いさん、壽々子と暮らしていて、清をもなにかと面倒を見ていた（時162）。
２月２日（土）。佐藤春夫が平井呈一をつれて永井荷風を訪れる。これがきっかけで、荷風はハーンに熱中する。へるん35.46以下を参照。
６月。帝国図書館が小泉八雲記念碑建立絵ハガキ三枚一組発行（へるん24.30）。この頃、土井晩翠が上野図書館前に寄贈の記念碑。翼をつけた天使たちが蜂蜜をなめている像は彼の「文蜜」を象徴するという（昭和女子大511）。
７月５日（金）。鈴木賢：焼津とヘルン先生（「火耕」19号。焼津市史通史編下323）12ページの論文（「大正～昭和初期の文芸熱　焼津の同人誌花盛り」）。

8月（推定）。稲垣八重子は夏休みに父巌と東京でおち合い、一雄一家、伯母壽々子と千葉県銚子の西10キロ、九十九里浜最東端海上郡の飯岡町で一ヶ月の避暑生活を楽しんだ（小野木82）。一雄は知人で銚子市内の中学校校長を勤めたＩ氏の実家にいたようだ。（「ラフカディオ・ハーンと銚子大漁節」http:/www.choshinet.or.jp/~hiro/deai/j-tairyo.htm）。氏に贈ったのであろう銚子大漁節の第七第八（「日本の古い歌謡」）の黒インク原稿が残されている。

この月、天野尚子（後に小泉時と結婚）が出生（北山2.208）。

10月。鈴木賢：焼津に於ける小泉八雲（伝記第2巻10号103-114。伝記学会）

30日（水）。朝7時過ぎ、丸山学が焼津を訪れ、ヘルン踏査に来る。駅前にある二代目山口乙吉の土産物屋が大きなネオンサイン「八雲」を掲げてあり、その下の赤い達磨のデザインに驚く（丸山149）。

この頃二代目乙吉（梅吉）は仕事が順調で、焼津でも指折りの物産陳列の店「八雲」を持っていた。

天野市助が城之腰町の八雲旧居を所有、居住。山口家はその筋向いに移っている。丸山は、「いかにも駿河灘の荒浪で育った海の丈夫らしい当代乙吉」（丸山151）が「大きな鉄火鉢の前に端坐して、歯切れのいい海道訛（なま）りで私の問いに応じてポツリポツリ往年の思い出を語る」（同）のを聞いて、何となく、芝居で見た次郎長を思い出す。乙吉の紹介で開業医・ヘルン研究家の斯波敦にも会う。「強度の近眼鏡をかけた細面（ほそおもて）の柔和な感じの人」（同152）。三代目乙吉の案内で波よけ地蔵も訪ね、「まことに法外に高い城壁」（同155）である防波堤にも上がる。それからちょうど運動会をやっていた小学校でヘルン諷詠の地記念碑を見る。他にはヘルンを記念するものは何も残っていない（同156）というのは間違いである。

11月2日（土）から四日間。焼津水産青年会（昭和9年発足）は京阪市場視察旅行。山口乙吉はこの年の会長を務めている。魚商人の師弟を集めて、交流や研究を図ろうとした。この会は戦争の激化により自然消滅した（焼津水産史上622）。

1936 **昭和11年**

この年「頭初」に静岡県教育委員会に八雲滞在の家を史蹟の指定を受けるため申請書

が出された（北山2.139）。天野庄平の名で出されたが、実際は斯波敦を初めとする当時の八雲顕彰会が行った。
5月9日（土）。史蹟指定がなされた（同2.145）。
8月（推定）。稲垣八重子は上京して父巌とともに一雄伯父の家に泊まり、東京のあちらこちらへ連れて行ってもらい、いろいろ欲しいものを買ってもらった。「このときには、父があまりに優しくて、不思議でした。身体が少し悪くなったときかもしれません」（小野木82）
9月16日（水）。この日亡くなった東洋丸・北原リキ（嘉永3年生）の葬列順の資料がある（「浜通りの民俗」104）。「隣人でシンセキ」（同103）でもある乙吉（二代目）は「北原家筋向いヤマオト」とあって「〇38中野家から養子にはいった二代目乙吉」とあるのは三代目の間違いであろう。三代目乙吉の妻山口すず（望月14）によれば、初代乙吉の長女てつは「婿養子｛中野鉄次郎｝を取り山口姓だったと聞きました」。
11月27日（金）。三宅驥一：焼津と小泉八雲（第一書房小泉八雲全集月報第一号）。

1937 **昭和12年**
月日不詳。十一谷義三郎編：ヘルン善人の書（金星社）。この中に「焼津にて」がある。
1月。巌はこの頃から、死後のことについてよく学校同僚で友人の竹淵喜明と話した。小野木140以下を参考に想像再現。
巌「僕は人間の霊魂は不滅ではないが、新しい間は生きていると思う」
竹淵は当惑して何か口ごもる。「・・・」
巌「それで困っていることがあるんです。相談にのってくれませんか」
竹淵「何ですね、真面目くさって」
巌「僕の死後の処理だが、焼かれるのも困るし、土葬も嫌だし・・・」
竹淵「どうして？」
巌「焼かれると僕の霊魂が、空中で迷って落着けないし、土葬にされたら尚更いやだし・・・」
竹淵「土葬だったら安らかに落着いていられていいのではないですか」
巌「まあ君、想像してみなさい、僕の霊が静かに眠っている。そこへ・・・」
竹淵「そこへ何です？」
巌「ガマが土を分けてごそごそ這って来たら、三年生きる霊が一度に怖れ死んでしまうじゃないですか」
竹淵「なるほど。それなら古代の人がやったように石の棺に納めてもらったらいいじゃないですか、遺言の中にはぜひそれを加えておきなさい」
巌「僕は無宗教だが僕の霊魂でも三年は生きていられるように思う。いやこれは信じています。偉い人ほど霊魂は長く生きているものです。まあ秀吉位になると五六百年

は生きていられる。どんな凡人でも一年くらいはいいです」
竹淵「僕らも一年は心配なく生きていられるわけですね」
巌も人は死んでおしまいという考えではなかった。死後も霊魂は、あるいは霊魂としてある程度生き続けるというわけだ。明治37年10月3日の後の項での一雄と巌の会話参照。
21日（木）。八重子の母方叔父が巌の所へ来る（小野木94）。良春か？
22日（金）。「昨夜青森より八重子の叔父来たり一晩アパートにとまって種々の楽しからざる話あり」（同94）。別居している妻と家族のことであろう。
巌は当時左京区北白川電停前の洛東アパートに住んでいた。土浦亀城が設計したこのアパートは1934年竣工で六階建てのワンルームで、トイレ、食堂は共同であり、学生が多かった。後に光華寮となった。
彼から小泉清への手紙がある（同92以下）。清は経済的に困っていた。「此の間弐拾円くれたばかりだのに又一ヶ月も経たぬ内に又大金を御送付。何だか気の毒な気がしてなりません」。売られた原稿が話題になっている。「此の間の原稿のことに就いての問合せを誤解したのぢゃないかとも考へました。原稿の方も君の昨日の御手紙でよく得心が行きました。別にあの原稿が今すぐ入用だからといふわけでもなく、売った金が慾しいといふのでもありませんから御心配なく、君の御配慮におまかせしますから最良と思はれる策をお採りください。画室もいよいよ落成したさうでお目でたう御座います。君の年来の宿望の一つが叶ひ、いやな借金も払ひ終り、閏ちゃんも中学。いよいよ意義深き　力強き　積極的な明朗な　君の躍進生活が始まる事を大慶に思ひ、欣ばしく期待します」
清はめったにハーンのことは口にしなかった。「ハーンの息子だということを嫌った。」ただ一度だけ「お金にこまって親父のノートを川端康成に売りました」（ワシオ58）というので、ここで話題の原稿のことではないかと想像する。
4月。閏が中学校に入学する（同92）。
この月、義弟で外科医の種市良春が、5才になる前の稲垣昭男を連れて上京、巌と会う。（上野？）動物園に行った（同82）ことが昭男の忘れられない思い出になった。「罪のない子供たちに対する罪滅ぼし」（同82）をしたのである。
5月1日（土）。稲垣巌の妻ミドリの父、種市良一が亡くなる（一松堂）。
7月10日（土）。シナ事変。巌は「昭和13年の夏に上京し、慶応病院に入院するまで、わが家に滞在して治療していた」（時119）。その前の7月か8月は京大病院にいたらしい（同212）。
8月15日（日）。巌が東京信濃町慶応病院で没。享年40才。縦縞柄の浴衣を着ており、そのまま寝棺に収めた（へるん38.52）。稲垣ミドリはこの年父についで夫を失ったのである。葬儀は多摩霊園で行われた（同157）。稲垣家の墓は松江、万寿寺だが、巌夫妻の墓は府中市多摩霊園（12区4種17側）にある（同83）。この時、小泉時が盲腸炎

から腹膜炎を起し同じ病棟に入院していたので、一雄夫婦は掛け持ち看護になった(時162)。

巌は一見して混血とわかる長身（180ｃｍ）白皙、鼻が高い、眉目秀麗、髪・眼は黒。後ろ姿や横顔はまったくの外人（小野木198)。「親が有名なため子は迷惑する」とこぼしたことがある（同172)。有名な父親を持ったこと、さらに混血であることが小泉兄弟を悩ませた。連珠に夢中になったように凝り性、内気な性格（同88)。八雲も内気であった。

９月。この頃一雄は東京市荏原区中延町1056。時が小三から中三（昭和９年から15年）かけてここにいた（時150)。1934から1960にかけて中延にいた（54年204)。

1938 **昭和13年**

時が小学校６年生のとき、一度清に絵を見てもらう（ワシオ144)。清は39才。

５月１日（日)。「文豪八雲を偲ぶ集い　令息を招き来月焼津で」(東京日日新聞。毎日新聞東京本社)。

この頃まで小泉家は中延（時147)、その後世田谷尾山台（同148)。

1939 **昭和14年**

月日不詳。山口乙吉は昭和14年16年焼津水産会常置委員（任期２年か)。(焼津水産史下1066)。

２月25日（土)。女学生の稲垣八重子は17才の誕生日。八戸の家に友達を集めて誕生パーティー。父巌から余興に教わったマルチニクの原住民のダンスを妹京子と踊り歌う。７才の昭男もいる。

「ドンスルリャ　テンマツリャ　ドンスラリー　ポンペケノ　ポンペケノ　アルミニ　セシミニ　ポンペケノ　ポンペケノ　ドンスラリー」。この一部を一雄は「ボンビャギャン」と覚えていた（「八雲」13.5以下)。「八雲」18.7以下でまた取り上げている歌詞表記は少し変わり、譜面も付いた。巌は「家族の前では原住民らしくパンツ一枚の裸になって踊っていたそうです」(「八雲」18.8)。

４月１日（土)。焼津で「八雲会」設立。この会は時代が時代で記録すべき実績がない。昭和22年１月の焼津文化協会設立まで続き、この協会事業に吸収された。八雲4.29にあるメンバー表は

顧問　焼津町長　焼津駅長　焼津実業協会　山口乙吉

会長　斯波敦

主事　鈴木賢　井上竜馬（朝日新聞記者）　岩崎徳治（編集者）

　　北山正邦（北山宏明の兄。人口問題研究所）　桜井正寅（東大独文副手）

月日不詳。ある日、小泉一雄は一人で旧制八雲高等女学校を訪問する。「小泉八雲は

自分の父親です。校名の八雲高等女学校とは縁があるのでしょうか」（丹沢98）と教頭の近藤章久に質問した。近藤はドイツで発行されていたTauchnitz版『怪談』を読んでいた。一雄はすらりとした長身、青い目、縮れ毛（丹沢102）で日本人と見られない可能性があった。

八雲という町名は、旧衾村の鎮守である氷川神社（創建は不明で1817文化18年よりかなり古い）で祭ってあるスサノオの尊が櫛名田姫の新居を構える時に詠んだ「八雲立つ　出雲八重垣　夫婦隠みに　八重垣作る　その八重垣を」から取った。この歌は、八雲が日本国籍をとるときに改名の必要があって、セツの養祖父稲垣万右衛門が一部用いたものであった。また巌の長女八重子の名のいわれともなった。

4月（推定）。上記訪問が機縁となって、一雄がこの年から約四年間目黒区にある私立の旧制八雲高等女学校（昭和13年創立）で教鞭を取る（ヘルン34.22）。彼は「徴用問題とからめ、何か定職を持つ必要がありました。父の友人舟木渡氏の従兄矢沢金平氏の仲立ちにより、八雲高女に勤めるようになりました」（へるん34.22丹沢98）。一雄の担当は国語と英語で、教員免許はない。給料は月60円（へるん同丹沢107）。

8月。教念寺住職北山宏明は、同寺に「ほがらか」会を作る。高等一二年生を中心とし、日曜日毎に会場に集合し、学習遠足等を行った。会員17名。終戦前後を除き、昭和22年ごろまで続いた（小川町誌124）。

9月26日（火）。八雲の教え子の座談会が島根県立松江中学校で行われる。「何だかちつぽけな、片眼の妙な英語教師が来たと思いました。まさかさういう大家という事は今日解かつたので、その當時誰も解りませんでした」（「旧師小泉八雲先生を語る」10）。これは焼津でもそうだった。

「松江時代の先生を思ひ出すとき、世界の一文豪だとか、日本を海外へ紹介した偉人だとかいふ感じではなく、小學校の生徒が、小學校の先生に對するやうな氣分を、私は今感ずる」（同54）。

1940 **昭和15年**

日時不詳。一雄は世田谷区尾山台の借家に転居。井戸水は鉄分が多く、妻が体調を崩したため翌年転居（事典215）。「昭和15、6年ぐらいから、海外の出版社から印税の支払いを渋るようになりました。昭和16年7月、アメリカによる日本資産凍結が始まり、ハーンに関する印税の支払いが全て停止しました」（丹沢98）。

9月。焼津町の郷土愛運動の表れである「郷土愛」は、新聞条例により終刊（戸塚4）。この同人会の同人は当時の焼津町の中堅人物を網羅した陣容である。その中に、山口乙吉がいた（戸塚12）。発行部数は6500部で町内全世帯に無料配布（「焼津春秋」創刊春季号22）。

1941 **昭和16年**

月日不詳。一雄は渋谷区猿楽町の借家へ転居（事典215）。
4月。三代目山口乙吉の娘山口富子が焼津南小学校に入学する。7才の彼女は同級生の｛江口｝富美子に「おとうさんに当たる三代目乙吉さんは今、南洋に行っていること、だから家のことはすべて初代乙吉の息子の梅吉おじいちゃんが守っている」と一気に話した（「八雲」16.29）。「その頃の山口さん宅は間口がとても広く、うちの玄関の何倍もあっておどろきでした。通りに面した表の入口から幾部屋かを隔てて、裏のお台所まで続いている長いコンクリートの土間をかけ抜けると、裏口の外は堤防、そしてもう海でした。堤防までの地面には手漕ぎの木造船がいくつか静かに並んで休ませてありました」（同30）。江口富美子の夫は後に焼津駅前記念碑のブロンズ像を創った人（昭和42年8月12日参照）。
5月25日（日）、26日（月）。矢野峰人は初めて静岡に来て、鷹匠町の蒲原有明を訪問し、インタビューする。矢野はハーンの孫弟子であり、有明はハーンのロセッティ著作に取り組んだ。矢野の恩師エドワード・クラークは有明のように一方の耳が聾していたが、このクラークは来日したばかりのハーンの個人授業を数週間受けた（年表291）。
7月22日（火）。午後5時の満潮時に台風襲来。激浪、砂礫。特に中区玉の浦海岸は防波堤がなく、激浪に曝された。全半壊家屋21戸・床上浸水50戸。
秋（9月頃か）。清の息子閏が、早稲田中学校より神戸高等商船学校機械科に入学。入学式の夜、親子はレストランでご馳走。予想外の出費で清は旅館に泊れず、寒い一夜を駅待合室、洗面所で過ごす（ワシオ169）。この親子の間で45年位前（1894－1896）の八雲の神戸滞在の話題は出なかったのだろうか。また、清が予算を考えないで行動するのは八雲の金銭への無頓着を思わせる（参照へるん42.84以下）。
　この年の「日本女性」9月・10月号に萩原朔太郎の「小泉八雲の家庭生活」が載る。焼津からの8月17日、18日の手紙が引用されている。
10月。北山宏明「鈴宮塾」という女子青年を主とする修養会設立。当初会員30名、18年1月男子部「青年塾」、9月両者合体。塾生42名になる。読書会などをし、しだいに評判が高まった（小川町誌125）。

1942 **昭和17年**
一雄は「竹下道場で熱心に｛合気道の｝稽古に励み、昭和十七年頃だったと思うが、免許皆伝の鉄扇をいただいた」（「八雲」15.3）。

1月。小泉閏は帰省して、入学式の夜の父のことを知る（ワシオ169）。
24日（土）。小花清泉没。享年71才（明治4年19年参照）。
4月。一雄は翌年3月まで八雲高女一期生5年級の担任。またこの四月から京北實業の夜間課程にも出講していたと推定されている（丹沢104）。八雲高女の一期生が5年生のとき（昭和17年度）「借家で傾いた猿楽町｛13番地｝のお宅」を訪れた。「『江戸っ

子』気質の優しい奥様が古い下駄を割り、七輪に焼べてお湯を沸かし、お茶を入れ、しかも大事なお菓子まで出してくださいました」（同101）。

戦時中で、近所に気兼ねし、日本人でないと言われるのやスパイの嫌疑をかけられるのを恐れてひっそり暮らしていた（同101）。この頃一雄は心境を授業中に板書した。

物言えば　唇寒し　秋の風

英習字担当。一度退職してから（年度不詳）復職した理由は「夜間の訓練を免除してもらえるから」（同104）。

1943 **昭和18年**

月日不詳。田代三千稔訳：日本の面影（愛宕書房）。この中に「乙吉の達磨」「焼津にて」「漂流」がある。

時期不詳。閏は学業繰上げで戦争に駆りだされる。信心嫌いの清ではあるが、閏のために金毘羅宮のお守りをもらってきた。閏は南の海で幾度か遭難。漂流もした。20年春まで父と音信途絶（へるん37.5）。清は八雲の金毘羅参り（1884明治27年4月3日から6日）を知っていたろうか。

1月。田部隆次編：小泉八雲読本続（第一書房）。この中に、「乙吉の達磨」「焼津にて」。

3月（推定）。一雄「小泉八雲の縁の者として、学校に関係していると、軍部との絡みで学校にご迷惑がかかるから引き取らせてもらいたいのですが」と言って、八雲高女を辞職。

4月（推定）。共栄女子商業へ。「目立たぬように振舞おうとする」一雄の意向にかなっていたらしい。勤労動員の引率教師もやった。戦後に一雄は「本來私は小心者で『物言へば唇寒し秋の風』どころか、『物言へば首が危し』であった戦時中は只管口も筆も動かさなかつた」（一雄2.7）と述べる。

12月。共栄女子商業の同僚の思い出（代用教員木村礎、後に明治大学学長）「＜勤労動員の＞引率教師は小泉一雄であった」「50歳前後だったのであろう。私がこの学校に赴任したとき＜昭和18年12月＞、既にこの人はいた。その面貌はわれわれが写真で知っている父とよく似ていた。多分英語を担当していたのであろう。静かな話し方をする温和な人で、彼と話をしていると、戦争中の日本社会の喧騒が消え去り、何となく落ち着いた気分になった。やや猫背であった」（丹沢103）。

1944年 **昭和19年**

月日不詳。八重子が21歳の時に絢子（稲垣）が生まれる（「八雲」17.17）。

2月29日（火）。小泉時は19才。官立無線電信講習所で卒業前の遠洋航海実習中、陸軍輸送船に乗る。パラオから北東（または北方）75マイルのところで米潜水艦に攻撃

され、左足を負傷。護衛艦"鷺"に救助される（Re-Echo 158 へるん37.5)。
4月。北山宏明が応召する（小川町誌125)。
26日（水)。壽々子が井草の療養所で没（時129)。享年41才。同級生浅岡すみの思い出（「八雲」2.24以下）がある。

1945 **昭和20年**
3月10日（土)。東京大空襲。この前あたり一ヶ月ほど一雄は病気休職。「このような長期にわたる欠勤は今までにないことだった。久々に出勤された時、無精髭をはやしたまま、マスクをして校長と話をされていた。帰られてそのまま学校をお辞めになった」(丹沢103)。
6月19日（火)。深更、静岡大空襲。蒲原有明は罹災し、近郊の中吉田の山本秀雄方に同居し、9月に鎌倉へ帰住。
23日（土)。沖縄戦敗北。この後、後の文芸評論家桶谷秀昭は京北中学を退学。晩秋に父が復員したので、「半年後」元の中学に編入学した。彼は一雄を見かけた。「小泉八雲の御子息が英語を教えていて、その弱々しいくらい繊細で温厚な人柄は、はた目にもこの廃墟に耐え難く感じられた。案の定、小泉先生はすぐにおやめになった」と二行だけ記した（桶谷169)。10月半ばも過ぎた頃。一雄は焼け出されたも同然の渋谷猿楽町に住んでいて、フェラーズと再会。時の就職の世話、生活の面倒を見てくれた(時206)。時は「私たち親子三人は終戦後、焼け残った渋谷区代官山の長屋のような家にいた（昭和28年4月まで猿楽町十三番地、今の代官山に在住（「八雲」16.5丹沢104)。或るとき、フェラーズ准将が一雄から借りていた本を返しに、突然このあばら家に立ち寄られたことがあった」(「八雲」4.4）と記す。
11月17日（土)。フェラーズの宿舎であったアメリカ大使館公邸へ家族で呼ばれる。この日は一雄の誕生日だった。そこでサインに使ったパーカーの万年筆を贈られた。フェラーズは「何か執筆していますか・・・・自分に出来ることなら何なりといいつけてください」という趣旨のことを言った（カミガミ256)。フェラーズの長女ナンシーが編集と前書きを担当して、一雄が父から受けた家庭教育の内容と思い出をつづった『リ・エコー』が生まれた。

1946 **昭和21年**
3月。清は読売新聞社主催第一回新興日本美術展（日本橋三越）で読売賞受賞。作品は「向日葵」他3点。二年に一度くらいしか家に帰れない閏は、船上で受賞の知らせを受け、小躍りして喜んだ（ワシオ170)。この頃、朝日新聞記事に載った一雄の感想は「分からないような絵をかいて、困ったものです」(焼津春秋創刊春季8)。
3月26日（火)。この日米軍が焼津の航空写真を撮った。その一部。港はまだない。

3月末。北山宏明は復員した。「私が中支から復員したのが昭和二十一年三月の末であった。大根菜の入った粥を啜り乍らも家族一同無事で食卓を囲むことの出来たのは何より有難つた」(「焼津春秋」創刊号」31 昭和26年。焼津文化協会)。彼は「ほがらか会」「鈴宮塾」を再開する (小川町誌125)。

5月。一雄はこの月まで京北實業所属で京北中でも教鞭を取った。5月分の俸給は180円 (丹沢107)

時期不詳。清は息子閏を連れてストリップ劇場へ連れていったことがある。「おれはストリップが好きだが、それは絵の勉強のためなんだ。モデルはやとうと金がかかるので、動く裸婦を勉強に来ているんだ」(求龍堂)。清のこの発想は、筆者には中世インドの神秘主義詩人ゲースーダラーズが読者に警告する言葉を思わせる。「おまえは美しい人たちを見つめ、ほっそりした体つきを目にする。しかし私が見ているのは、創造主の見事な成果なのだ」(参照『アンネマリー・シンメルのパキスタン・インド歴史紀行』253以下)。

父に反発したかのような清は、父の優しさを受け継いでいた。「おれはどちらかといえば、犬よりも猫の方が好きだ。犬は人間のごきげんをとろうとして、まつわりついたり、媚びたりするから猫よりも余計神経が疲れる」(求龍堂)。ある日、片目の犬が鷺宮の家に現れ、餌をもらってなついたが、突然姿を消した。心配になった小泉夫妻は一日足を棒にして片目の犬を探し回った (求龍堂)。

夏。この年かどうかはっきりしないが、戦後まもなくの頃、焼津市の郷土史家鈴木賢は猿楽町の一雄を、渋谷駅から歩いて訪問した。「日差しの強い、酷しい暑さの日で、東京はバラック建ての家が此処、彼処と建てられていたが焼跡はまだそのままの処が多かった。」尋ね尋ねしてようやく探し当て、「道より小路を可成り入って、行き止まりになっている平屋建ての古びた大きな家で、このあたりの焼け残った一角の一軒であった。」暑いため、障子も襖もはずして、家の中が一座敷になっていた。

一雄は奥まったところに、身体の具合が悪いといって横になっている。賢は、上り框にいる一雄の妻喜久恵に挨拶。

喜久恵「どなたかのご紹介ですか」
賢、非礼を反省して詫びる。
一雄「焼津からですね」
賢「そうです」
一雄「焼津の方ならお上がりなさい」
賢、ようやく安堵。戦中戦後の焼津の話をする。
一雄は賢に自分で描いた絵や版画を見せる。（焼津春秋創刊春季８）

追加的訂正
全般的注意。この基礎調査の試みは2002年頃から始めた。しかし、当時は資料が十分にそろっていなかった。このため、発表済みの本調査は随時追加し訂正しなければならなかった。後に本シリーズはCiniiで容易に閲覧できるようになった。特に二回目までは後で大幅に変更したものの未発表である。訂正版が必要な方は連絡されたし。
1881明治14年。２月の項。引用文中の「シラ―グリオ部屋の雌鶏」を「雌鶏のシラグリオ後宮」訂正。
1919大正８年。１月の項。天野甚助は１月21日（火）没。享年78才。林叟院老僧が過去帖を調べてくださった。甚助はこの寺の墓地に葬られたが、後に一家が大島に移住した際に彼のお骨はそちらへ移された。
第四回の利用文献で、焼津水産史・上巻の刊行年は、1981平成56年は昭和56年に訂正。

参考・引用文献等　（　）内は略称

一松堂種市医院：創立百拾壱周年記念誌　一松堂。1987昭和62年。（一松堂）
桶谷秀昭：風景と記憶。彌生書房。1980昭和55年。（桶谷）
小野木重治編著：ある英語教師の思い出　小泉八雲の次男・稲垣巖の生涯。恒文社。1992平成４年（小野木）
小山久二郎：ひとつの時代　－小山書店私史－。六興出版。1982昭和57年。（小山）
後藤肅堂：小泉八雲の觀た燒津。史蹟名勝天然紀念物第四集第十二號別刷。出版年表示なしだが、昭和４年頃と推定。
小泉清画集　限定500部。1973昭和43年。求龍堂。ページ付けなし。（求龍堂）
昭和女子大学近代文学研究室：近代文学研究叢書　第七巻　1972昭和47年。（昭和女子大）
戸塚凛：皇道産業焼津践団史　郷魂祀奉賛会。1976昭和51年。（戸塚）
高田力：小泉八雲の横顔。北星堂書店。1934昭和９年。（高田）
丹澤栄一：教育者・小泉一雄（Lafcadio Hearn長男）の活動について。英語英文学叢第27号（早稲田大学英語英文学会）。1997平成９年。（丹沢）
日野雅之：隠岐に残っていた八雲からセツへの手紙。山陰中央新聞。2001平成13年１

月28日。(日野)
真杉高之・鈴木賢編集：焼津の大正～昭和初期文芸熱　田中久雄の周辺。柳屋本店内長岡英男発行。1989平成元年。
同編集：焼津の大正～昭和初期の文芸熱　焼津の同人雑誌花盛り。柳屋本店内長岡英男発行。1989平成元年。
丸山学（木下順二監修)：小泉八雲新考。講談社学術文庫。1996平成 8 年（丸山)
望月雅彦編：南方文献調査室研究報第一輯――日本軍南方占領地域への水産業南進――皇道産業焼津践団（聞き書き編)。南方文献調査室。1996平成 8 年。
焼津信用金庫五十年小史。1968昭和33年。
焼津水産史・上巻。焼津魚仲買人水産加工共同組合。1981昭和56年。(水産史)
ワシオ・トシヒコ編著：回想と評伝抄　画家・小泉清の肖像。恒文社。1995平成 7 年。(ワシオ)

略称の一部再掲。
北山宏明『小泉八雲と焼津』(改訂増補再版）＝北山 2 。小泉一雄『父八雲の憶い出』＝一雄。小泉一雄『父小泉八雲』＝一雄 2 。小泉時『ヘルンと私』＝時。梶谷泰之『へるん先生生活記』＝生活記。金子健二『人間漱石』＝金子。長谷川寅吉『遺したい焼津の方言と浜言葉』＝寅吉。平川祐弘『小泉八雲とカミガミの世界』＝カミガミ。小泉清画集(恒文社)＝画集。その他は既発表を参考。